

バックナンバーのご案内

過去の「雑司が谷旧宣教師館だより」は、公式ホームページからご覧いただけます。

右の二次元コードを読み取っていただくか、インターネットで「雑司が谷旧宣教師館だより」と検索してください。



雑司が谷旧宣教師館だより

第75号

2025年9月30日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032東京都豊島区雑司が谷1-25-5 TEL/FAX 03-3985-4081



旧宣教師館イベント報告2

スプリングコンサート ―ピアノと箏のマリアージュ―

5月11日(日)に旧宣教師館の春の恒例・スプリングコンサートを開催しました。

1920年代に製作されたとされる、西川ブランドのウエスタンピアノを中心に、これまで様々な楽器とコラボレーションした演奏会を催してきました。今回は美しい旋律を奏でるピアニストの小林萌里さんと、優雅な箏の音色の東海林一代さんによる演奏でした。箏は弦を弾くことによって音色を奏でる楽器ですが、時に打楽器のように弦を叩く奏法には、参加した方々もびっくりされていました。

ともに弦を用いた楽器による合奏は、洋風木造建築の建物で美しく響きわたり、とても素敵な時間を過ごすことができたのではないのでしょうか。次回10月26日(日)にオータムコンサートを開催します。ぜひ楽しみにしててください！



『赤い鳥』と楽しむ、おはなし会

『赤い鳥』と楽しむ、おはなし会」を7月19日(土)に開催しました。『赤い鳥』作家である小川未明による『赤いろそくと人魚』の紙芝居と、詩人谷川俊太郎の『美しい夏の朝に』を朗読し、参加された9名の人たちに夏休みのひとときを楽しんでいただきました。

会場を『赤い鳥』コーナーからマツケレーブ像が見守る食堂に移して行いました。広い場所に会場を移したことで、暖炉の上に投影した紙芝居のスライドも見やすくなり、開放感がありました。今回は少し難しい内容でしたが、語り手の抑揚のある力強い朗読は私たちを物語の世界に引き込んでくれます。また谷川俊太郎の詩の世界は、夏の暑さに疲れた心に休息を感じさせてくれるものでした。次回は10月19日(日)の開催です。



(馬場 章)

旧宣教師館イベント報告1

雑司が谷旧宣教師館～ひと夏の体験～

―朝顔の押し花でうちわを作ろう―



8月24日(日)に夏休みの親子体験イベントとして、うちわづくりを開催いたしました。4組10名の方々に夏のうちわづくりを楽しく体験していただきました。

スタッフが事前に用意した色とりどりの押し花した朝顔を、子どもたちは目を輝かせながら選び、楽しみながらうちわにデザインしていきます。その上に和紙をのせて、手をべたべたにしながら糊付けしていきます。ふだんご家庭ではできない体験に、お子さんたちは大喜びでした。

またうちわを乾かす間に、館内の説明と江戸時代に大流行した朝顔の栽培の歴史や、パネルを使って朝顔が描かれた浮世絵のお話をしました。今回は未就学児童もご参加いただいていたので、旧宣教師館内の雰囲気と今回の経験がこの先も記憶に残ってくれば嬉しいと思います。これから開催するイベントにも、たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

(馬場 章)

あさがお えが 美しき朝顔を描いた江戸の絵画

一人々を魅了した朝顔について—

8月24日(日)に開催したイベント「朝顔の押し花でうちわを作ろう」では、お子さんたちによる、オリジナリティ溢れる素敵なうちわを見ることができました。

また、当館事務室前のスペースでは、毎朝のように朝顔が涼しげな花を咲かせてくれました(図1)。

ここでは、より詳しく、朝顔を描いた江戸の美術作品についてご紹介いたします。

■ 朝顔栽培の盛り上がり

江戸時代末期のいわば「朝顔ブーム」のころ、様々な色合い、形の朝顔が生み出され、「変化朝顔」と呼ばれました。変化朝顔は、江戸の愛好家たちによって競うように生み出され、その珍しさが多くの人たちに愛されました。以下にご紹介するように、変化朝顔を描いた絵も現代まで残されています。

■ 朝顔を描いた絵画

① 葛飾北斎『朝顔に蛙』江戸時代(19世紀) 東京国立博物館蔵(図2)

北斎といえば、『富嶽三十六景』のうち大波と富士山を描いた「神奈川沖浪裏」が有名ですが、彼は動物や植物、人物すべての描写に優れていました。この作品は、朝顔の葉を歩く蛙の様子を写実的に表しています。沢山の朝顔の中には、桔梗の花のような星形に咲く桔梗咲きや、まだら模様のもの、花芯(おしべとめしべ)の変化がみられるものなど、様々な咲き方があります。



図2 国立文化財機構所蔵品統合検索システム
(<https://colbase.nich.go.jp/collection/items/tnm/A-10569-2785?locale=ja>)

「神奈川沖浪裏」とは異なる、小景を切り取った繊細な表情のある作品です。

② 二代歌川広重(喜斎立祥)『三十六花撰 東都入谷朝顔 廿八』

慶応2(1866)年 国立国会図書館蔵(図3)

この絵に描かれているのは、江戸末期～明治初頭にかけて朝顔の栽培が盛んだった入谷の様子です。絵の手前側には色とりどりの朝顔が描かれています。一番上の紫色の朝顔は、まだら模様の花弁を持っています。その左下に咲く赤い朝顔は、花芯が花弁のように変化しています。さらに、一番下の朝顔は、一つの花の中から花弁が吹き出しているように見えます。この作品の背景には沢山の朝顔が描かれています。現在も、入谷の鬼子母神周辺では毎年朝顔市が開かれ、賑わいを見せています。



図1 当館職員撮影

ここで紹介した作品は、朝顔を描いた絵画のごく一部です。これらの作品は、江戸の朝顔がいかにも個性豊かだったかを現代に伝えていています。しかし、実際の変化朝顔の中には明治維新や第二次世界大戦といった社会の動きによって廃れた品種が少なくありません。皆さんも、朝顔を描いた作品を調べ、江戸を魅了した美しさを感じてみませんか。

また、当館から徒歩で約10分の場所にある雑司が谷鬼子母神で毎年7月初頭に行われる「夏市」でも、朝顔を楽しむことができます。古くから続く夏の風物詩を、ぜひご堪能ください！
(今野 美怜)

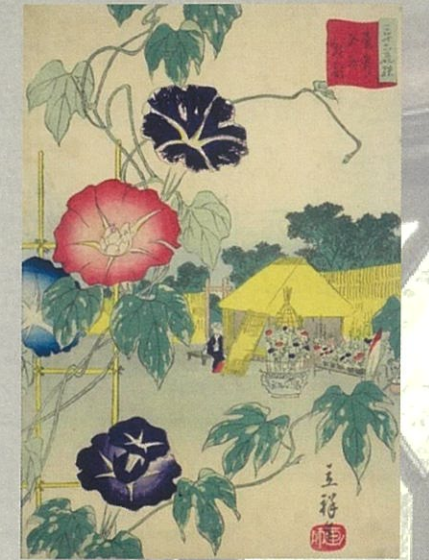


図3 立祥『東都入谷朝顔』
国立国会図書館デジタルコレクション
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1308735>)

かんざうしりょう 「館蔵資料でふりかえる旧宣教師館の3つの時代」

—旧宣教師館の数奇な歴史をたどる—

4月22日(火)より、当館2階ではパネル展示を行っています。当館が所蔵する写真や文書といった資料から、3つの時代にスポットライトを当てています。

1. マッケーレブが暮らした時代

当館は、今から118年前の1907(明治40)年に、アメリカ人宣教師のジョン・ムーディ・マッケーレブの居宅兼事務所として建てられました。ここを拠点に、宣教活動や慈善事業が行われました。

2. 変化する時代を生き抜いて

マッケーレブは、1941(昭和19)年の太平洋戦争開戦直前に、母国アメリカの命令によって帰国を余儀なくされました。その後所有者が次々と変わり、1980年代の近隣住民を中心とした建物保存運動によって、マンション建設による取り壊しの危機を乗り越えました。

3. 豊島区の施設として、未来へ

豊島区が取得したのち、修理や復元工事が行われました。1989(平成元年)1月26日(木)に豊島区立雑司が谷旧宣教師館として開館し、1999(平成11)年には、東京都指定有形文化財(建造物)「旧マッケーレブ邸(雑司が谷旧宣教師館)」となりました。

今回の展示は、以上の3章からなります。このように、当館は戦争や再開発といった時代の波を乗り越えて現在に伝わっていることが分かります。実際の展示では、ここには掲載していない図版も見ることができます。皆さまのご来館をお待ちしております。

(今野 美怜)

